別冊１

平成２４年度
広島市専門家評価
評価報告
（牛田小学校）

平成２５年３月

広島市学校評価システム専門家評価
評価委員会

評価報告について

このたび、広島市学校評価システム専門家評価「評価委員会」（以下「本委員会」という。）では、専門家評価（専門家による第三者評価）を実施し、ここに評価報告を取りまとめました。

この専門家評価は、「広島市学校評価システム第三者評価検討会議」の最終報告書で提言された実施方法等に基づいて実施しています。

専門家評価は、各学校の学校経営や教育活動の改善に向けた取組とそれに対する教育委員会の支援について評価し、学校及び教育委員会に対して意見・提言を行うことによって、学校評価の目的を果たす役割を担うものです。そのため、本委員会は、学校における自己評価活動（計画・実践・評価・改善）について専門的見地からより客観的に評価することと、学校に対しては学校経営や教育活動の改善について、また教育委員会に対しては学校への支援について、意見・提言を行うことを役割としています。

本委員会では、今年度、専門家評価を希望した広島市立小学校１校と広島市立中学校２校を評価対象校に決定し、実施しました。本委員会において、学校の状況に応じて評価の目的や評価する項目を定め、学校経営や学習指導等に専門性を有する学識経験者及び退職校長を含む評価チームを編成して、昨年１１月から学校への訪問調査等を行い、その後、学校と報告案に基づく協議を行い、この評価報告を作成しました。

この評価報告にある意見・提言を踏まえ、学校での主体的な学校経営や教育活動の充実・改善に向けた取組が進むとともに、学校の取組が促進されるよう、教育委員会の適切な支援が行われることを期待します。

平成２５年３月

広島市学校評価システム　専門家評価
評価委員会　委員長　林　　孝
副委員長　曽余田 浩史
副委員長　髙妻 紳二郎

Ⅰ　評価目的

牛田小学校が「言語活動を通して、基礎的な知識と技能を身につけ、筋道を立てて考える力と表現する力を育てる」ために取り組んでいる「授業づくり（指導展開，学習評価等）」やその指導の状況について評価しその充実・改善に向けた意見・提言を行う。

Ⅱ　評価項目

(1) 児童の状況について
(2) 学校運営の状況について
(3) 授業の状況について
(4) その他の教育活動について
(5) 環境・施設について
(6) 家庭・学校との関係について

Ⅲ　評価方法・作業

1　評価手法

今回の評価方法としては、「Ⅱ　評価項目」に関する情報を、学校及び教育委員会から提供を受けた資料、管理職員及び教職員等からの聞取り、授業等の観察によって収集し、それらを総合的に分析した。

2　データ収集方法

データ収集対象	方　法
学校管理職員	聞取り、資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）
教職員	聞取り、授業等の観察
保護者	聞取り
その他（教育委員会）	資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）

3　作業の経過

時期	内　　容	実施主体
4月	・　専門家評価実施の通知、希望の受付	教育委員会
5～9月	・　参考資料の収集・分析、対象候補校の選定	教育委員会
10月	・　参考資料の収集・分析、対象候補校からの聞き取り（10/9） ・　対象候補校の選定 ・　評価委員会（評価対象校の決定） ※　電子メールによる会議 ・　評価対象校から希望等の意見聴取（10/22）	教育委員会 評価委員会
11～12月	・　評価委員会（評価目的、評価項目の決定、評価チームの編成） ※　電子メールによる協議	評価委員会
1/28	・　評価チーム会議（評価計画、今後の予定） ・　学校訪問調査（教職員からの聞取り、授業等の観察 他）	評価チーム
1～3月	・　評価チーム会議（評価報告案作成） ※　電子メールによる会議 ・　学校及び教育委員会から評価報告案作成に向けた意見聴取 ※　学校訪問による意見聴取（3/14）	評価チーム
3/6	・　学校及び教育委員会から評価報告案に関する意見聴取	評価委員会
3月	・　拡大評価委員会【評価委員会・評価チーム会議】（評価報告案他）	評価委員会・評価チーム

4　評価者（評価チーム）

チーフ（評価委員）	曽余田浩史（広島大学 大学院 教育学研究科 准教授）
評価専門委員	森重　洋（矢野みどり幼稚園　園長、元 小学校長）
評価専門委員	財津　伸子（比治山大学 非常勤講師、元 中学校長）

Ⅳ　評価報告

1　評価・分析結果の概要

【総合的な状況】

牛田小学校の児童は基本的な生活習慣や社会性を家庭の教育力と学校の指導によって十分身につけている。また、保護者は本校の状況に安心して任せており、地域からの信頼も得ているようである。

児童の学力の状況について校長、教頭、教員とも高いと自認しており、教員の授業力を高めることによって学力をより伸ばし、児童、保護者の期待に沿うことを課題と考えている。

子どもが落ち着いている、学力も全体的に高い水準である、私学志向の子どもが多い、保護者からの要望もあまりあがらない等の状況から、学校に大きな問題がないと教員が捉えていることが、危機感のなさにつながり、チームとしての取り組み、実践、活動の欠如に陥ることになる。校長はこうした学校の現状を的確に把握しながら、これからの進む方向をさらなるレベルアップ、「仰高」として教職員に提示して鮮明にしている。そして、教員の組織的な活動を高めることによって、教師の授業力・指導力を高め、課題の解決に取り組もうとしている。全教職員がこのことについて共通理解し、具体性、統一性をもって取り組んでいく必要がある。

これからの課題として、「仰高」の内容の具体化、めざす児童像のいっそうの具体化・明確化がまず求められる。すなわち、児童に「仰高」をどのように具体化させているか、児童がどのようになることを目指しているかである。そして、「仰高」の実現のために、研究目標（「伝えたいことが豊富に存在する教育活動」）に沿った教科指導力の向上と実践を通した授業像の明確化、さらには、学力・学習面以外での自己有用感・自己効力感の涵養が大切だと考える。

【児童の状況】

① 児童は落ち着いて学習している。子どもたちは先生の話をよく聞いていた。生活の様子も全体的に一定のレベルの態度を持っているようである。

② 全体的におとなしい子が多かったが、挨拶をどの子もよくしてくれた。言葉づかいも丁寧であった。教室移動が静かに整然とできていたので感心した。

③ 児童全員分が掲示されている書写の作品や絵、音楽での合奏などは全体的にしっかりしてよくできている。教室のロッカーなどは、極端に乱雑なものはなく、整理されて使われていた。

④ 高学年になるほど、しっかりした行動ができるように成長しており、高学年が高学年として下の学年の手本となっていると教師はとらえている。

⑤ 観察で見た中では、低学年も一定の秩序を身につけて行動していた。低学年で多くみられる好奇心や興味関心を旺盛に発揮する行動や高学年でのやや思春期の独特の自己主張なども特に目立たず、どの学年も落ち着いた生活態度が共通して似たような印象であった。

⑥ 学力については、算数は高いが国語については高いと言い切るには根拠が見当たらない。しかし、全般的には保護者も教員も「本校の児童は学力が高い」と感じている。基礎基本状況調査結果の概要だけでは、このように言い切ることは難しいように感じる。この共通意識は、児童の生活面における理解力・判断力の高さなどの影響であろうか。本年度の「基礎・基本定着状況調査」の通過率は、算数は市、県に比べて高い（教科全体　県＋3.3　市＋5.4）が、国語はほぼ平均である（教科全体　県＋0.1　市＋1.8）。学校規模にしては高いともい

えるが、分布状況などの分析がなく、「学力が高い」の実情（どの層が多いためか、少ないためか）がつかめなかった。

⑦　「生活と学習に関する意識・実態調査」では基本的な生活習慣の確立、自己効力感や自己実現力、学習動機にかかわる項目について高い肯定的評価が出ている。一方で、「学校へ行くのが楽しい」に否定的は回答者も10％前後いる。データ全体を見ていないので詳細はつかめない。

⑧　児童は指導されたことを素直に従い身につけている。ただ、取り組んだことについて児童自身が良さや誇りを感じているかについては、聞き取りからは分からなかった。

【学校運営の状況】

①　校長は、児童の学力が高いので、それをさらに伸ばす指導力がなければ、児童・保護者の期待に添えないとの考えで、取り組みを組織化して、授業力の向上に取り組んでいる。現在は、「逆向き授業設計」により授業づくりに取り組んでいる。校長の意図する組織的な取り組みについては、全教員が理解し取り組んでいる。また、教員はその成果も感じており、成果が出始めている。

②　校長は、児童の力をより伸長させることを「仰高」という言葉で示し、教師もそれを意識している。「仰高」はすべての面でより高いものを目指すことを意味しているようであるが、主任等のとらえでは学力・学習面が第一に意識されているようである。ただし、「児童にそのことをどのように具体化させているか、児童がどのようになることを目指しているか」との質問には、聞き取りの範囲では、心構えや抽象的な説明以外には明らかな授業像や児童像（イメージ）が聞けなかった。

③　校長―教頭―企画委員会―各学年会を取り組みの基本組織として、各学年会が校長の方針を受けながら、主体性を持って学年の課題を見出し取り組むような組織づくりを目指しており、現在は企画委員会で各学年の状況が提案・報告・共有され、各学年での主体的な取り組みが出始めている。この状況については、教頭や各主任も成果を感じている。

④　各教員の取り組みは、学年会で計画・実施・評価されているが、自己申告書との関連性については具体的には聞かれなかった。

⑤　児童の学力が高いこと、その力をさらに伸ばさなければならないことをほぼすべての主任が共通して聞かれた。若い教員が多いので、ベテランの授業力を若い教員に伝えることが必要であると複数の主任が考え、担当の範囲で進めていた。

⑥　ベテラン教員が若い教員をどのように指導し、指導力を引き継いでいくかが学校全体の課題であり、その場を作りたいと教頭、主任が思っているが、まだ十分に展開できていない。また、若い教員には、授業づくり等の研修を積極的におこない、さらに力をつけてほしいと感じている主任もいた。

⑦　実践の指導は、適切な経験の開きが最も効果的で、後輩にとっては経験が少し上の先輩の実践を見て習得することが効果的である。本校の場合50歳代→40歳代→30歳代→20歳代といくつかの段階を経ることがよいと思うが、今回の聞き取りでは間のステップがはっきり見えなかった。間の年齢層の教員がいないのか、実践を示せる教員がいないのか不明であった。

【授業の状況】

① 本年度の研究主題は、「確かな学力を身につけ、自ら考え、活動する子どもの育成～言語活動を通して、表現力を高める～」で、授業は「表現したいこと、伝えたいことが豊富に存在する教育活動が展開されなくてはならない」とし、「言語活動に視点をあてた授業づくり」を目指している。

② 知識、理解面では繰り返し指導し定着が図られている。鉛筆の持ち方やノート等学習具の使い方との学習技能についてもほとんどの児童が十分に身につけている。

③ 観察した授業の多くが、プリント学習か教師の指示・発問・説明の形で進められていた。児童は静かに課題に取り組んだり、挙手して発表したりしていた。

④ 観察した範囲ではあるが、児童の考えの交流やグループでの課題解決の場面が少なく、教師の指示による教師中心の授業がほとんどであった。席はグループにしていても、学級全体で教師の発問に答える、各自で作品を作る、班で意見をまとめて発表することが行われており、グループ内で児童相互の考えの違いや気づきを出し合わせるような場面は少なかった。

⑤ 教師が児童に語りかけたりやりとりしたりする場面は少なく、教師の児童への積極的な働きかけの雰囲気やダイナミクスは感じることが少なかった。

⑥ 本時のねらいが提示されていない授業が多かった。教科等によっても違うが、何となく始まり、何となく終わるのではなく、メリハリのついた授業が大切である。「めあて」「まとめ」の明確な授業づくりに取り組んでほしい。

⑦ 児童は教師の指示や説明を理解しているように見受けられた。各授業での発表は、予定調和的な発言が多いように感じられた。児童の思考の流れを揺さぶる・破るような発問は見られず、間違いが少なくてよいとも、物足りないとも感じられた。

【その他の教育活動】

① 挨拶の励行、体力づくり、清掃活動についても取り組んでいる。主任は一応の成果は感じているが、挨拶については積極性が見られないことも感じている。

【環境・施設の状況】

① 学校は清掃が行き届き、清潔で気持ちがよかった。また、いろいろな絵や写真やニュース、言葉や標語、お知らせなどが展示・掲示してあり、美化に努めている。ただし、新校舎の階段、踊り場は建築設計上、掲示ができない個所があり、残念である。

② 教室の掲示物はどの学級も丁寧に作成してあり、児童の学習の記録が掲示され ていた。学年によって統一した目標が掲示されたり学級ごとの個別の目標が掲示されたりしていた。掲示物は教師の意図により作成・管理されていることが伝わるものであった。

③ どの教室にも読書の本がたくさん設置してあった。教室内に季節を感じる自然物（植物、飼育物）があればよいのではないか。

④ 校舎は輪になった廊下の両側にある教室配置であるが、真ん中の広場に屋根がないため、広場のある階は廊下まで雨や雪が流れ込み、掃除が難しそうであった。広場は、雨、雪の日の防寒性や安全性に疑問が感じられたが、聞き取り等で施設設備について聞くことができなかった。

⑤　手洗い場がタイルづくりになっていたり、教室が円形配置になっていたりホームルーム教室で教師のコーナーが広く取られていたり等、生活環境へ配慮した作りが感じられた。

【家庭・地域と学校の関係】

①　保護者は本校について、児童が落ち着いており、学力も高く、中学受験者が学級の半数以上いることなどを評価し、入学させたい学校ととらえているようである。

②　保護者は本校の保護者について、塾へ行かせる保護者が多く、学習の遅れを家庭がフォローする力がある、経済的に安定した家庭環境が多いなどと自己評価している。

③　児童の状況については、服装などをみると落ち着いており、素直であるととらえているが、おとなしく、ものたりないとも感じているようである。

④　学校との関係については、教師の指導に意見が出ることもあるが、非常識な保護者でありたくないという思いもあり、教師や学校へ意見を言うことはないだろうととらえている。

⑤　もう少し保護者として学校に協力参加できる活動等があればいいと思っている保護者もいるようである。

⑥　保護者は学校の指導に一応の信頼を置いているが、各教員ともっとしっかり信頼関係を作りたいとも思っているように感じられる。

⑦　学級保護者会や保護者懇談などについて振り返ることが必要だと考えるが、今回の聞き取りでは判断資料を得ていない。

2　意見・提言

評価チームは、上記の評価・分析に基づき、牛田小学校及び教育委員会に対して、次のとおり意見・提言する。

(1)　牛田小学校に対して

①　「仰高」を児童にどのように理解させ取り組ませるかについて、教員から具体的なことが聞かれなかったのは、教員にイメージがないのではなかろうか。その結果、児童も意識はしていても行動に移せない。「仰高」を具体化するために、教務部や研究部等で、現在の学力・学習面、生活面の課題をさらに分析し、何を伸長させる必要があるかを具体化・明確化していくことが必要である。

②　学力の実態については、通過率の各層の割合をどうとらえるか等について、もう少し細かく分析して、課題の有無を明確にし、絞ることが必要である。

③　本校の本年度の研究目標に「伝えたいことが豊富に存在する教育活動」が行われ「言語活動」を取り入れた授業を増やすことが示してある。研究は数学の授業であるが、授業観はすべての教科に共通するものである。それが今回の観察ではほとんど見られなかった。現在「逆向き授業設計」による授業づくりに取り組んでいるが、まず授業の在りよう、学習の在りよう自体が変換される必要があると感じられる。授業づくり、学力・学習面における「仰高」の具体像の一つは研究目標に示した授業づくりであるということもできそうである。目指すべき授業像を、もっと教員全体が理解し自覚すること、そのための研修が必要である。

④　授業では、児童が予想した反応よりも幅広く高い反応が返ってくるという主任の感想があった。このような児童の実態もあり、教師の説明や友達とのかかわりの中で、自分の考えを試し、新しい知識や考えを、自分で獲得していく主体的な学びを育てていく授業がもっと必要ではなかろうか。

⑤　児童が家庭の教育力によって身につけていることを、さらに学校の取り組みによって高いものにするには、身につけることが児童自身の自己肯定感や効力感や誇りにつながるように指導することが必要である。このことをふまえて取り組みを計画、推進することが必要である。

⑥　学年目標、クラス目標、学習規律、合い言葉、保険・生活・あいさつの目標などが各クラスに掲示してあったが、子どもたちはこれらの目標に対してどのように思っているのだろうか。どれが中心なのか、どれが重点なのか、精選する必要がある。

⑦　各教員の自己申告書は実施されているが、校長―教頭―企画委員会―各学年会の組織で取り組んでいる課題把握と解決の取り組みとの関連は意識されていないようであった。個々の教員の取り組みについては自己申告書等でも意識を高めれば、学年主任の指導力に重なって効果的ではなかろうか。

(2)　教育委員会に対して

①　開放廊下により、廊下掲示ができないことから、掲示教育推進のための掲示スペースの確保等の施設整備。

②　校内授業研究の推進の指導。

③　若い教師に実践の中で授業づくりを示すことができる中堅教員の配置。